

フィンランド語の E 不定詞具格形として現れる動詞の意味特徴

坂田 晴奈

(東京医薬専門学校非常勤講師)

キーワード：フィンランド語、不定詞、コーパス、動詞の意味

1. はじめに

本稿は、フィンランド語¹の E 不定詞具格形として現れる動詞がどのような意味特徴を持っているかを明らかにすることを目的としている。坂田 (2010)(筆者の博士論文)では、E 不定詞具格形として現れる動詞には、人間の感情や態度と密接に関わるものが多いという分析結果が得られた。この結果は、コーパスデータを基にしたものであるが、本稿では、別のデータでも同じ結果が得られるかを検証する。

さらに、動詞の意味特徴を客観的に明らかにするために、比較対象として A 不定詞変格形のデータも取り上げる。

2. 先行研究

フィンランド語には、10 種類の不定詞が存在する。本節では、これらの不定詞を概観した後、本稿で扱う 2 つの不定詞についての先行研究をまとめる。

2.1. 研究対象

まず、フィンランド語の不定詞について概観する。Hakulinen et al. (2004: 491-492)(以下タイトルの頭文字を取って ISK とする)によると、フィンランド語には以下のような 10 種類の不定詞が存在する。puhua 「話す」を例に用いて示す。

¹ フィンランド語はウラル語族、フィン・ウゴル語派、バルト・フィン諸語に属する言語で、基本語順は SVO である。母音調和や子音階程交替といった現象があり、膠着語に分類される。例文の表記は正書法に依拠する。母音調和により接辞等に異形態が存在する場合、a または ä ならば A、o または ö ならば O、u または y ならば U と表記する。本稿でいうフィンランド語とは、いわゆる共通語を指すものとし、特に断りがない限り方言は扱わない。なお、欧文の先行研究の訳は筆者による。例文の形態素分析、グロス、訳も全て筆者による。

表 1: フィンランド語の不定詞

不定詞の形式	具体例	基本的な意味
A 不定詞基本形	puhua	「話す(こと)」
A 不定詞変格形	puhuakseen	「話すために」
E 不定詞内格形	puhuessa	「話す時」
E 不定詞具格形	puhuen	「話しながら」
MA 不定詞内格形	puhumassa	「話している」
MA 不定詞出格形	puhumasta	「話す(ことを止める etc.)」
MA 不定詞入格形	puhumaan	「話す(ことに対して etc.)」
MA 不定詞接格形	puhumalla	「話すことで」
MA 不定詞欠格形	puhumatta	「話さずに」
MA 不定詞具格形	puhuman	「話すはずだ」

本稿での研究対象は E 不定詞具格形であるが、その比較対象として A 不定詞変格形も取り上げる。A 不定詞変格形を比較対象としたのは、不定詞として現れる動詞に特に偏りが見られないと思われるからである。以下では、これら 2 形式について述べる。

2.1.1. E 不定詞具格形について

E 不定詞具格形は、動詞語幹に不定詞標識の *-e-* および具格語尾の *-n-* が後続することによって形成される。E 不定詞具格形は手段の副詞句として機能する構造において用いられ、様々な付加的関係も表す(ISK: 493)。

以下に、E 不定詞具格形の例をあげる。例文中では E 不定詞具格形を太字と下線で示す。(1) のように、人間の態度や感情を表して動作を補足する場合と、(2) のように、複数の動作を同時進行で行っている様子を表す場合とがある。

- (1) Katsel-i-mme Ville-ä **ihail-le-n.**
 look-PST-1PL Ville-PAR admire-EINF-INS
 「私たちは、感嘆しながら Ville を見た。」

(ISK: 493)

- (2) Hän palautt-i laitte-e-n **väittä-e-n** se-n ole-va-n rikki.
 3SG return-PST.3SG device-GEN claim-EINF-INS it-GEN be-PR.PTCP-GEN broken
 「彼はその機械が壊れているとクレームをつけながら、機械を返した。」

(ISK: 493)

E 不定詞具格形は、以下のように慣用的な表現としても用いられることがある。

- (3) Poikkean teille men-ne-n tul-le-n.
 drop.in-1SG 2PL-ALL go-EINF-INS come-EINF-INS
 「行き帰りにあなたたちのところに寄ります。」

(Penttilä 1957: 496)

kuulla 「聞く」、nähdä 「見る」、tietää 「知る」といった知覚動詞が E 不定詞具格形となる場合、名詞の属格形もしくは所有接尾辞により動作主標示がなされる。また、tulla 「来る」が用いられる場合にも動作主標示が見られる(ISK: 513)。

- (4) Minä en ole sano-nut, eikä kukaan ole sitä
 1SG NEG.V.1SG be say-PST.PTCP and:NEG.V.3SG anybody be it:PAR
 sano-nut kuul-te-ni.
 say-PST.PTCP hear-EINF-INS.POSS.1SG

「私は言わなかったし、私の聞いているところでは誰もそれを言わなかった。」

(ISK: 513)

2.1.2. A 不定詞変格形について

A 不定詞変格形は、動詞語幹に不定詞標識の -A- および変格語尾の -ksi-、さらには動作主の人称に一致した所有接尾辞が後続することによって形成される。A 不定詞変格形の場合、所有接尾辞は必須である(ISK: 507)。3 人称の所有接尾辞が付く場合が最も多いが、1 人称や 2 人称の所有接尾辞が付く例も少なからず見られる。変格語尾の -ksi- は、後ろに所有接尾辞が続くことにより母音に変化し -kse- となる。

A 不定詞変格形は、副詞的な修飾要素として用いられる(ISK: 491)。最も多い用法は「～のために」という目的を表すものである。以下に例をあげる。例文中では A 不定詞変格形を太字と斜字体で示す。

- (5) Hän säästä-ä osta-a-kse-en asunto-n.
 3SG economize-3SG buy-AINF-TRA-POSS.3 flat-GEN
 「彼は住居を買うために節約している。」

(ISK: 491)

A 不定詞変格形には様々な用法がある。(6) のように話者の考えや見立てを表す例、(7) や (8) のように動詞 olla 「ある、いる」の定形と結び付いて慣用的な表現を形成する例などが見られる。

- (6) Ketään ei huoma-ta-kse-ni ole unohde-ttu.
 anyone:PAR NEG.V.3SG notice-AINF-TRA-POSS.1SG be forget-PASS.PST.PTCP
 「私が気付いたところでは、誰も忘れられていなかった。」

(Penttilä 1957: 495)

- (7) Se tule-e jos on *tul-la-kse-en*.
 it come-3SG if be:3SG come-AINF-TRA-POSS.3

「もしそれが来るのであれば、それは来る。」

(ISK: 491)

- (8) Hän ei ol-lut *tietä-ä-kse-en* koko asia-sta.
 3SG NEG.V.3SG be-PST.PTCP know-AINF-TRA-POSS.3 whole thing-ELA

「彼はそのこと全体について知らないふりをした。」

(Penttilä 1957: 495)

2.2. 坂田 (2010) の考察

不定詞についての先行研究は多く見られるが、不定詞として現れる動詞の種類や意味について分析を行った研究は、坂田 (2010) 以外には見られない。したがって、ここでは坂田 (2010) の考察結果をまとめる。

坂田 (2010) では、コーパスデータを基に不定詞の分析を行った。用いたコーパスは、フィンランド内国語センターが主に作成した *Kielipankki* というコーパス・デポジトリに収録されているものである。本稿でも *Kielipankki* のデータを基に分析を行うので、コーパスの詳細は 3. で述べる。坂田 (2010) で用いたデータは、*Helsingin Sanomat* (ヘルシンキ新聞) が 1995 年に掲載した記事 (以下 HS1995 とする) の一部である。2 つの不定詞で用いたデータは、HS1995 の中でも異なるデータである。E 不定詞具格形の分析で用いたコーパスの総語数は 2,840,480 語で、得られた当該不定詞の用例数は 1,779 例であった。A 不定詞変格形の分析で用いたコーパスの総語数は 5,749,143 語で、得られた当該不定詞の用例数は 1,331 例であった。

E 不定詞具格形として現れた動詞の異なり語数は 464 語であった。頻度が高かった動詞は、*yllättää* 「驚かせる」(278 例)、*ajatella* 「考える」(116 例)、*viitata* 「指し示す」(51 例)、*hymyillä* 「微笑む」(28 例)、*johtua* 「～から発生する」(27 例)、*pitää* 「保持する」(26 例)、*päätellä* 「結論を出す」(26 例)、*tehdä* 「作る、する」(26 例)、*voittaa* 「勝つ」(22 例)、*hävitä* 「消える」(21 例) などであった。

E 不定詞具格形として現れた動詞で最も頻度が高いのは *yllättää* 「驚かせる」で、全体の 16% という高頻度であった。*yllättää* の E 不定詞具格形 *yllättäen* は、「思いがけなく」という意味の慣用表現として用いられるため、頻度が高かったと思われる。さらに、現れた動詞の意味特徴に関する記述を以下に引用する。

E 不定詞具格形として現れた頻度が高い動詞は、*hymyillä* 「微笑む」、*naureskella* 「嘲笑う」など、通常はさほど頻度が高くないと思われる動詞であった。また、このような動詞は継続性の高い行為を表すものが多い。E 不定詞具格形として現れた動詞全体を見ると、「笑う」「ぐずぐずする」「恥じる」

など、人間の感情や態度に直接関係した動詞が、他の不定詞の場合より明らかに多い。これは、態度や付帯状況を表すという E 不定詞具格形の意味特徴とも関係していると考えられる。E 不定詞具格形によって表される「～しながら」という表現は、「食べながら話す」、「歩きながら考える」のような動作の同時進行を表す場合の他に、「笑いながら答える」、「恥ずかしがりながら言う」のように、態度や感情を補足する場合も多く存在すると予想できるからである。

(坂田 2010 : 133)

他方、A 不定詞変格形として現れた動詞は、異なり語数で 377 語であった。頻度の高かった動詞は、saada「得る」(133 例)、päästä「離れる、達する」(77 例)、voida「できる」(35 例)、olla「ある、いる」(34 例)、nähdä「見る」(29 例)、hoitaa「世話をする」(21 例)、tulla「来る」(21 例)、muistaa「思い出す」(20 例)、estää「妨げる」(19 例)、tehdä「作る、する」(18 例)などであった。

A 不定詞変格形として現れた動詞の意味特徴について、E 不定詞具格形のような明確な特徴は見られなかった。その理由としては、A 不定詞変格形には様々な用法があり、不定詞として現れる動詞に偏りがないためであると考えられる。

以上のように、E 不定詞具格形として現れる動詞には、人間の態度や感情に直接関わる動詞が多いことが坂田 (2010) で実証された。これは、E 不定詞具格形の用法に大きく影響を受けたものであろう。

本稿では、坂田 (2010) では扱わなかったコーパスデータを基に、E 不定詞具格形として現れる動詞の意味特徴について再度検証する。

3. 研究方法

本研究で用いたのは、書き言葉コーパスのデータである。コーパスは、フィンランド内国語センター(Kotimaisten kielten tutkimuskeskus : 略称は Kotus)が主に作成し、インターネット上に公開している Kielipankki に収録されているものである。Kielipankki における個々のコーパスは、使用許可を取り、WWW のインターフェースで検索する仕組みになっている。

Kielipankki は、新聞、日刊紙、週刊誌(地方紙を含む)などの記事、および文学テキストを含むコーパスのデポジトリであり、総語数は約 1 億 8,500 万語である。この中には、フィンランド語だけでなく、スウェーデン語のテキストも含まれている。フィンランド語のテキストは 131,406,087 語、スウェーデン語のテキストは 53,473,670 語である(2012 年 11 月 7 日現在)。

新聞記事類のコーパス作成は Kotus によるものであるが、文学テキストは出版社から得たプレーンテキストをそのまま載せているものもある。大部分のフィンランド語テキストには、品詞や形態に関する情報が付加されているため、特定の語形を持つ語や、特定の品詞に属する語の検索に際しては、「WWW-Lemmi 2.0」というウェブインターフェースを持つ検索プログラムを利用することができる。したがって、ユーザーが自分で正規表現を書く必要はない。

本研究では、*Iltalehti* が 1996 年に掲載した記事(コーパス名は *ilta1996*)を用いた。*Iltalehti* は、首都ヘルシンキで発行されている夕刊紙であり、*ilta1996* の総語数は 955,644 語である。この *ilta1996* から、タグ検索により、E 不定詞具格形および A 不定詞変格形の用例を収集した。用例の出典は(*ilta1996/643331*)のように表記する。スラッシュの右側は当該用例を含む記事の識別番号である。

本研究の目的は、不定詞として現れた動詞の意味特徴を分析することである。よって、定形動詞として現れた動詞の頻度と比較することで、不定詞として現れた動詞の意味特徴の偏りを検証した。その検証のために用いたのは、*Saukkonen et al. (1979)* によるフィンランド語の語彙頻度調査である。

Saukkonen et al. (1979) は 1960 年代の小説、ラジオ、新聞、ノンフィクションの作品からなるコーパス(延べ語数 408,301 語、異なり語数 43,670 語)を基に、語彙頻度の調査をしたものである。*Saukkonen et al. (1979)* による語彙頻度は、最も頻度が高いものは *olla* 「ある、いる」で 23,796 回の出現、最も少ないものは 2 回の出現となっている。

この *Saukkonen et al. (1979)* におけるそれぞれの動詞の出現回数と、本研究で得られた不定詞として現れた動詞の用例数を比較した。

4. 分析と考察

ilta1996 より得られた E 不定詞具格形の用例は 689 例で、不定詞として現れた動詞の異なり語数は 315 語であった。他方、A 不定詞変格形の用例は 275 例で、不定詞として現れた動詞の異なり語数は 127 語であった。本節では、これら 2 形式の不定詞として現れた動詞の意味特徴を分析・考察する。

4.1. E 不定詞具格形

ilta1996 から得られた E 不定詞具格形として現れた動詞の中で、最も多かったのは慣用表現として頻度が高い *yllättää* 「驚かせる」であった。以下に、上位 10 語の動詞を示す。

表 2: E 不定詞格形として多く現れた動詞

順位	不定詞として現れた動詞	用例数	Saukkonen et al. (1979)
1	yllättää 「驚かせる」	63	48
2	kävellä 「歩く」	22	54
3	ajatella 「考える」	16	242
4	vedota 「訴える」	16	26
5	viitata 「指し示す」	16	72
6	johtua 「～から発生する」	15	197
7	lähteä 「出発する」	12	399
8	nauraa 「笑う」	11	32
9	päätellä 「結論を出す」	11	39
10	uhata 「脅す」	11	38

上位 10 語の動詞を Saukkonen et al. (1979) の語彙頻度と比較してみると、Saukkonen et al. (1979) において頻度のさほど高くない動詞が、本研究においては比較的多く現れている傾向がうかがえる。表 2 における動詞で、人間の感情や態度に直接関わる動詞は少ないが、現れた全ての動詞を見ると、(10) や (11) に見られるような、「笑う」などの人間の感情を表す動詞が目立った。

- (9) Berit menett-i ensin yllättä-e-n sisare-nsa.
 Berit lose-PST.3SG firstly surprise-EINF-INS sister-GEN.POSS.3

「Berit はまず、思いがけなく姉を失った。」

(ilta1996/405977)

- (10) Lopulta viulu löyty-i huono-ssa kunno-ssa lelu-laatiko-n
 at.last violin be.found-PST.3SG bad-INE condition-INE toy-box-GEN
 pohja-lta, isä kerto-o hymvil-le-n.
 bottom-ABL father talk-3SG smile-EINF-INS

「バイオリンは、おもちゃ箱の底からひどい状態で見つかったんだ、と父は微笑みながら語る。」

(ilta1996/406674)

- (11) Naura-e-n ja vilkutta-e-n he juokse-vat kohti auto-a.
 laugh-EINF-INS and wink-EINF-INS 3PL run-3PL towards car-PAR

「笑ってウィンクしながら、彼らは車の方へ走っていく。」

(ilta1996/407769)

E 不定詞具格形として現れた 315 語の動詞のうち、54 語(17.1%)が人間の感情や態度に直接関係する動詞だと判断できた。以下にその一覧を示す。

【人間の感情や態度に直接関係する動詞一覧(アルファベット順)】

arastella「びくびくする」／armahtaa「気の毒に思う」／arvostella「批評する」／epäillä「疑う」／halveksua「軽蔑する」／helliä「可愛がる」／hienostella「きざに振る舞う」／hihkua「大声を出す」／huohottaa「ため息をつく、喘ぐ」／huolehtia「留意する」／huomioonottaa「考慮する」／huutaa「叫ぶ」／hymyillä「微笑む」／hymyilyttää「笑わせる」／hyväillä「善意を表現する、可愛がる」／ihailia「感嘆する」／ihmetellä「驚く」／irvistellä「歯をむき出す」／itkeä「泣く」／jylistä「不平を言う」／karjua「わめく」／kiittää「賞賛する、感謝する」／kiristellä「歯ぎしりをする」／kirkua「金切り声を上げる」／kunnioittaa「尊敬する」／luottaa「信用する」／nauraa「笑う」／pelätä「怖れる」／puhista「ため息をつく」／puhkua「ため息をつく」／punnertaa「重い足取りで歩く」／rypistää「しわを寄せる」／sadatella「悪態をつく」／sormeilla「ごまかす」／syyttää「告訴する」／säittää「咎める」／tahtoa「望む、欲する」／toivottaa「望む」／uhata「脅す」／uhmata「反抗する」／ujostella「恥ずかしがる」／vaalia「大事にする、面倒を見る」／vaatia「要求する」／valittaa「文句を言う」／vapista「震える」／varoa「気をつける」／vedota「訴える」／vieroksua「遠ざける」／virnistää「にやにやする」／väittää「反論する」／väristä「ぶるぶる震える」／ylistää「褒める」／yllyttää「唆す」／äristä「わめく」

E 不定詞具格形として現れた動詞は、人間の感情や態度に直接関わる動詞が多いという傾向が、坂田 (2010) と同様裏付けられたと言える。この結果は、次節の A 不定詞変格形の結果と比較すると、さらに明確に見えてくる。

4.2. A 不定詞変格形

ilta1996 から得られた A 不定詞変格形として現れた動詞の中で、最も多かったのは saada「得る」であった。以下に、上位 10 語の動詞を示す。

表 3: A 不定詞変格形として多く現れた動詞

順位	不定詞として現れた動詞	用例数	Saukkonen et al. (1979)
1	saada 「得る」	26	2160
2	päästä 「離れる、達する」	22	399
3	olla 「ある、いる」	11	23796
4	muistaa 「記憶する」	7	208
5	nähdä 「見る」	6	517
6	voida 「できる」	6	2303
7	hoitaa 「世話をする」	5	160
8	löytää 「見つける」	5	177
9	pitää 「保持する」	5	1065
10	pystyä 「できる」	5	173

上位 10 語の動詞を Saukkonen et al. (1979) の語彙頻度と比較してみると、Saukkonen et al. (1979) において頻度の高い動詞が、本研究においても多く現れている傾向がうかがえる。以下に、例をいくつか示す。

- (12) He halua-vat työ-vuorottelu-un *saa-da-kse-en* levähdys-tauo-n.
 3PL want-3PL work-alternation-ILL get-AINF-TRA-POSS.3 standstill-rest-GEN
 「彼らは、途中休憩を得るために勤務交替を望んでいる。」
 (ilta1996/406915)

- (13) *Kehitty-ä-kse-en* ihmisen on murtaudu-tta-va
 develop-AINF-TRA-POSS.3 human.GEN be.3SG break-PASS-PR.PTCP
 historia-n kahle-i-sta.
 history-GEN fetter-PL-ELA
 「発展するためには、人間は歴史の足かせから脱却しなければならない。」
 (ilta1996/405822)

- (14) Minu-n *muista-a-kse-ni* ne lehmä-t sa-i-vat se-n
 1SG-GEN remember-AINF-TRA-POSS.1SG it.PL cow-PL get-PST-3PL it-GEN
 taudi-n juuri lampaa-sta.
 disease-GEN just sheep-ELA
 「私の記憶では、それらの牛はまさに羊からその病気をもらったのだ。」
 (ilta1996/405968)

A 不定詞変格形として現れた 127 語の動詞のうち、人間の感情や態度に直接関係すると判

断できた動詞は、*kostaa*「復讐する」、*kiusata*「苦しめる」、*vedota*「訴える」の 3 語(2.4%)のみであった。これは、E 不定詞具格形の結果と大きく異なる。動詞の意味特徴として、他に特異な傾向は見られず、フィンランド語における動詞の頻度にほぼ似通った出現状況であると言える。

ここで、2つの不定詞として現れた動詞の頻度と、*Saukkonen et al. (1979)* における動詞の頻度をさらに詳しく比較してみる。以下の表 4 および表 5 に、E 不定詞具格形および A 不定詞変格形として現れた動詞の上位 30 語までを示す。合わせて *Saukkonen et al. (1979)* における動詞の頻度もあげる。*Saukkonen et al. (1979)* の調査においては、100 回以上現れていればかなり頻度が高いと考えられるので、100 回以上出現している動詞を太字と斜字体で示す。

表 4: E 不定詞具格形として現れた動詞(上位 30 語)

順位	不定詞として現れた動詞	用例数	Saukkonen et al. (1979)
1	yllättää 「驚かせる」	63	48
2	kävellä 「歩く」	22	54
3	ajatella 「考える」	16	242
4	vedota 「訴える」	16	26
5	viitata 「指し示す」	16	72
6	johtua 「～から発生する」	15	197
7	lähteä 「出発する」	12	399
8	nauraa 「笑う」	11	32
9	päätellä 「結論を出す」	11	39
10	uhata 「脅す」	11	38
11	saada 「得る」	10	2160
12	ottaa 「取る」	9	793
13	huomioida 「気付く」	8	8
14	hymyillä 「微笑む」	8	20
15	liittyä 「結び付く」	8	251
16	pitää 「保持する」	8	1065
17	tehdä 「作る、する」	8	1046
18	katsoa 「見る」	7	428
19	yrittää 「試みる」	7	136
20	laskea 「下りる、計算する」	6	262
21	luottaa 「信用する」	6	33
22	tulla 「来る」	5	1675
23	ajaa 「運転する、駆り立てる」	4	130
24	antaa 「与える」	4	1096
25	arvioida 「見積もる」	4	87
26	harkita 「計画する」	4	54
27	kunnioittaa 「尊敬する」	4	35
28	lentää 「飛ぶ」	4	45
29	mukaiilla 「模倣する」	4	0
30	olla 「ある、いる」	4	23796

表 5: A 不定詞変格形として現れた動詞(上位 30 語)

順位	不定詞として現れた動詞	用例数	Saukkonen et al. (1979)
1	saada 「得る」	26	2160
2	päästä 「離れる、達する」	22	399
3	olla 「ある、いる」	11	23796
4	muistaa 「記憶する」	7	208
5	nähdä 「見る」	6	517
6	voida 「できる」	6	2303
7	hoitaa 「世話をする」	5	160
8	löytää 「見つける」	5	177
9	pitää 「保持する」	5	1065
10	pystyä 「できる」	5	173
11	saavuttaa 「到達する」	5	164
12	voittaa 「勝つ」	5	124
13	kostaa 「復讐する」	4	0
14	säilyttää 「保存する」	4	86
15	tehdä 「作る、する」	4	1046
16	välttää 「やめる」	4	49
17	estää 「防ぐ」	3	98
18	jääda 「残る」	3	459
19	käsittää 「含む、理解する」	3	125
20	osoittaa 「示す」	3	295
21	pysyä 「留まる」	3	111
22	selvittää 「明らかにする」	3	112
23	selvitä 「明らかになる」	3	59
24	tulla 「来る」	3	1675
25	uskoa 「委ねる」	3	166
26	varmistaa 「確かにする」	3	23
27	ymmärtää 「理解する」	3	160
28	aloittaa 「始める」	2	155
29	auttaa 「助ける」	2	143
30	ehtiä 「間に合う」	2	101

表 4 および表 5 を見ると、E 不定詞具格形で、Saukkonen et al. (1979) において 100 回以上現れた動詞は 15 語(50.0%)である。それに対し、A 不定詞変格形で、Saukkonen et al. (1979) において 100 回以上現れた動詞は 24 語(80.0%)である。A 不定詞変格形として現れる動詞の方が、Saukkonen et al. (1979) における頻度が高い動詞が多く含まれていると言える。この傾

向は *ilta1996* の全用例においても言えることである。*Saukkonen et al. (1979)* で 100 回以上現れた動詞を *ilta1996* 全体で見ると、E 不定詞具格形は 315 語中 65 語(20.6%)、A 不定詞変格形は 127 語中 47 語(37.0%)であった。*ilta1996* と *Saukkonen et al. (1979)* はデータの規模や性質が異なるが、E 不定詞具格形として現れる動詞の頻度が、A 不定詞変格形として現れる動詞の頻度に比べて、通常の動詞頻度に即していないとは言える。つまり、E 不定詞具格形として現れる動詞には、偏りが見られるということがここでも実証できる。

5. おわりに

本節では、本研究での考察結果と、それによって得られた成果および今後の課題について述べる。

4.で考察したように、E 不定詞具格形として現れた動詞には、人間の感情や態度に直接関係した動詞が頻出していた。A 不定詞変格形の場合と比べても、頻度の高さは明らかである。

本稿の成果としては、坂田 (2010) で検証したことを、異なるデータを用いて再検証し、いずれの結論も同じ傾向を示したということにある。つまり、E 不定詞具格形として現れた動詞の意味特徴は、データの特異性によるものではないという証明がある程度できたことになる。

ただし、坂田 (2010) で用いたデータと、本研究で用いたデータは、同じコーパス・デジトリに収録されたデータであり、新聞記事であるというテキストの性質も共通している。今後は、文学作品あるいは口語資料など、全く異なる性質のデータを用いた検証が必要である。さらに、データの規模を拡大して検証するという課題も存在する。

そして、動詞の意味を客観的にどう判断するかということも、大きな課題である。本稿では厳密な意味の分類基準は特に設けなかったため、「人間の感情や態度に直接関わる動詞」という枠組みが曖昧であった。今後、少しでもその枠組みを明瞭なものにし、動詞の意味を判断する必要がある。

略号一覧

- =形態素境界	GEN = 属格	POSS = 所有接尾辞
./: =形態素内の意味境界	ILL = 入格	PR.PTCP = 現在分詞
1, 2, 3 = 人称	INE = 内格	PST = 過去
ABL = 奪格	INS = 具格	PST.PTCP = 過去分詞
AINF = A 不定詞	NEG.V = 否定動詞	SG = 単数
ALL = 向格	PAR = 分格	TRA = 変格
EINF = E 不定詞	PASS = 受動形	
ELA = 出格	PL = 複数	

参考文献

ISK=Hakulinen, Auli, Maria Vilkuna, Riitta Korhonen, Vesa Koivisto, Tarja Riitta Heinonen, Irja Alho (2004) *Iso suomen kielioppi*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

Penttilä, Aarni (1957) *Suomen kielioppi*. Porvoo: WSOY.

坂田晴奈 (2010) 『フィンランド語の不定詞について—使用実態から見る動詞性と従属度—』東京外国語大学大学院地域文化研究科平成 23 年度博士論文.

Saukkonen, Pauli, Marjatta Haipus, Antero Niemikorpi and Helena Sulkala (1979) *Suomen kielen taajuussanasto*. Porvoo: Werner Söderström.

The semantic features of the verbs as the *E*-infinitive instructive in Finnish

Haruna Sakata

(Tokyo College of Medico-Pharmaco Technology)

Keywords: Finnish, infinitive, corpus, meanings of verb

The purpose of this study is to clarify the semantic features of the verbs which appear as the *E*-infinitive instructive in Finnish. According to Sakata (2010), my doctoral thesis, it was clarified that, among the verbs as the *E*-infinitive instructive, there appear many verbs closely concerned to human emotion and manner. This result is based on the data of corpus. In this study, I verified whether the same result can be seen using the other data. I used the data of the *A*-infinitive translative for comparison to clarify the semantic features of verbs objectively.